

今年の夏も、普通に始まって、普通に終わっていくのだろう。

若くて綺麗な女性、とちやほやされる年齢は過ぎ去り、
胸がときめくような恋をすることもなくなった。

いつかきっと、素敵な人に出会えるだろう、
そう思っていたのに、もうこんな年になってしまった。

40年間の人生で、私は何度も何度も恋をした。
たくさんの男性を愛して、愛されて、そして終わってきた。

そして今日、12年引きずった恋に別れを告げられるはずだ。

私は、車を広い駐車場の隅にとめ、
今はもう閉鎖されてしまった国立公園の入り口にひとりへと向かう。

驚くほど晴れた青空とは正反対に、
立てかけられている「閉鎖中」の文字は暗く錆びている。

まるで今の私のような。

12年前、28歳だった私には、同じ年の恋人がいた。
仕事も、食事も、寝ることさえも惜しいくらい大好きな彼だった。

そんな彼と、12年前の今日、この場所で別れを決めた。
ちょうど、付き合ってから6年目の記念日だった。

わざわざ記念日に別れなくても、と思ったが、
若い頃の衝動は、抑えられない。

嫌いで別れたわけではないが、
ただ、きっと、どちらももう少し遊んでみたかったのだろう。

「結婚」がチラつく年齢でもあったし、
お互いがお互いを最後にする勇気は、当時の私たちは持ち合わせていなかった。

「お互いさ、40になっても相手がいなかったら結婚しよう」

帰り際、彼が冗談まじりの笑顔を見せながら言った。

「で、付き合った記念日に、もう一度ここに来よう」

SNSもなかったのも、彼とはそれきりだ。

それ以来、私は心のどこかで40歳の自分たちに期待していた。
私も彼も、恋をしていませんように。

「私は、ひとりだよ」

真っ青な5月の終わりの空に向かって呟いた。
空を見上げて目を瞑ると、太陽の光で赤く感じる。

5月の風が、私の12年間にも及ぶ未練を絡めとってくれているようだった。

「帰ろう」

何かを期待してやってきたわけではないので、長居する必要はない。
私は、「閉鎖中」の文字を一瞥し、軽くなった心で駐車場へと向かう。

今日は、本当に空が綺麗だ。

「上ばかり見て歩いてたら、ちょっとした幸せにも気付けないよ」

突然、懐かしい声がした。
私は驚きのあまり声を出せない。

声のする方を見るが、ずっと空を見ていたためか色彩が変でよく見えない。

その声は、少し歳を重ねてはいるが、確かに彼だった。

「40になるの、ずっと待ってたんだ」